

場の個別性と一般性をつなぐ掛け合い歌の技法

ラオスの掛け合い歌カップ・サムヌアを事例に

梶丸岳（京都大学）

カップ・サムヌアはラオスの民謡「カップラム」の一種であり、ラオスのフアパン県でラオ族や赤タイ族によって歌われてきた掛け合い歌である。現在は基本的に追善供養儀礼の夜に、セミプロの歌手たちによって徹夜で歌が歌われる。発表者は 2016 年の本学会大会において、ペース記号論をベースにした小山（2012）の「コミュニケーションの出来事モデル」などを理論的背景として、カップ・サムヌアがどのようにコンテクスト化を達成するのか、換言すればどのように歌の場に埋め込まれるのかをその全体的な流れや具体的な歌詞を手掛かりにしながら分析する、という発表を行った（梶丸 2016）。

本発表はこの発表で論じきれなかった部分に焦点を当て、カップ・サムヌアと場の関係について明らかにすることを目的とする。具体的にはこの掛け合いの歌詞が小山の「出来事モデル」におけるどういった層を指標しているのかを改めて分析するのに加えて、前回の発表で述べた「場のフレームを設定する一定の音響」とは何かを検討する。

追善供養儀礼で歌われるカップ・サムヌアは全体として（1）儀礼の理念的プロセスに関わるもの、（2）男女の擬似的恋愛遊び（トーニエー）、（3）聴衆への祝福、の 3 つに分けられる。全体の進行としては（1）が掛け合いの最初と最後の部分に位置し、その間に（2）が、さらに多くの場合（2）の中に（3）が挿入されるという形になっている。

まず歌詞が指標する層に注目すると、（1）は小山の言う「象徴的意味範疇」つまり文化的意味範疇を指標しているように見えるが、その表現と実際の場の状況を見てみると、適宜参加者の社会文化的背景といった「経験世界」、さらに具体的な「場の構成要素」についても歌詞の中に織り込んでいることがわかる。これによって、一見すると具体的な場の状況に関わりなく同じ歌詞が歌われており、実際そういう一般的な表現が中心であるように思われる一方、場に個別的（特殊的）な層への投錨も為されている。

こうした指標的投錨は（2）においても同様に見られる。（2）は現実の恋愛ではなく、歌っている内容も必ずしも現実に沿っているわけではない。あくまで「恋愛の駆け引き」を遊戯的に演じてみせるだけであり、「今・ここ」の状況に必ずしも合わせる必要がない。だが、そうしたなかでも相手の名前を使用して呼びかけるといった、最低限その場に合わせた「場の構成要素」への言及は必要である。

キーワード 指標性、コンテクスト化、民族詩学、カップラム、ラオス

（3）では逆に、その場に個別的な要素への言及が中心となる。聴衆への祝福は基本的にその場の主催者と、歌い手におひねりを渡した人物が対象となる。そこでは相手の名前や職業、家族などに合わせた言祝詞が行なわれる。だが、何を言祝詞讚えるのかについては、ラオス社会で一般に用いられる定型的表現を敷衍した内容が中心となる。つまり、言祝詞であろうとも一般的表現は使われることになる。

以上のように、場合によって一般的表現と個別的表现のバランスを変えながら、指標的に場への埋め込みを行なってカップ・サムヌアの掛け合いは進行していく。その基盤となるのが「一定の音響」の繰り返しである。カップ・サムヌアにおいて繰り返されているのは、定型的な旋律の繰り返しだけではない。さらに意味のない音節（襯詞）や一定の母音（多くは副詞）の引き延ばしが文章のフレーズ感を生み出し、文法的パラレリズムが歌詞の間にリズム感を生み出している。また、掛け合い全体の流れも場ごとに繰り返されていると言える。

民族詩学では長らくアメリカ先住民の語りなどを対象に、こうした繰り返しを詩的実践として分析の俎上に上げてきた。そして、一定の形式で語ることがいかに社会と結びつき世界を作っているかを明らかにしてきた（Kroskrity and Webster 2015）。カップ・サムヌアに観察されるのは、上述のような音楽と言語にまたがる反復が場をフレーミングすること、まさに民族詩学において論じられてきた、形式が持っている、言語と社会を構成/再構成する力である。

以上から、カップ・サムヌアでは様々なレベルにおいて場の一般性と個別性が併存し、結び付けられていると言えよう。歌い手たちはこうした技法を用いながら、掛け合いを続けることで歌の場を共同構築しているのである。

【参照文献】

- 梶丸岳 2016. 「ラオスの掛け合い歌「カップ・サムヌア」におけるコンテクスト：歌のコンテクスト化と記号論的記述」日本文化人類学会第 50 回研究大会：B03
- 小山亘 2012. 『コミュニケーション論のまなざし』三元社。
- Kroskrity, P. V. and Webster, A. K. (eds.) *The Legacy of Dell Hymes: Ethnopoetics, Narrative Inequality, and Voice*. Indiana University Press.